摘要

本研究の目的は愛知県内を事例として「平成の大合併」を経験した県内の全ての小学校の社会科副読本をとりあげ,その発行状況・内容の実態を明らかにし,それらを踏まえ「平成の大合併」前後の社会科副読本を比較することによって,その内容の変遷や特徴についての動きを明らかにすることである.

研究の背景として小学校第 3 学年・第 4 学年において「身近な地域」を伴った地域学習は地理的技能や郷土愛を育成するために大きな役割を果たしている.しかし度重なる合併により、社会科副読本の内容と児童の「身近な地域」の乖離が問題視されてきた.静岡県や群馬県では市町村合併後副読本の研究が行われてきた.そこで,愛知県においても「平成の大合併」を経験した 64 市町村の内,旧春日町・旧清洲町・旧新川町・旧甚目寺町の 4 町を除く 60 冊を対象として分析を行った.

その結果,教科書の記述に準拠している教科書準拠型の副読本が全体の 93%を占めていることが明らかになった.また「～について調べてみましょう」などの記述がある学習展開重視型の副読本も全体の 93%に達していた.合併後に至っては学習展開重視型が 100%を誇っていた.つまり「副読本の教科書化」の傾向が見られた.そして合併前後の内容比較では,合併前の事例の取り上げ方に偏りが存在していることが明らかになった.

以上を踏まえて, 愛知県の「平成の大合併」を経験した市町村の社会科副読本はほとんどの市町村で教科書の記述や学習展開に沿った形を採用していることが明らかになった.そして教科書と社会科副読本の役割を分担するためにミニ副読本を各小学校単位で作成する必要があるという結論に至った.

しかし,本研究では社会科副読本の作成には至っておらず,具体的な地域資料を生かした授業実践も行ったわけではない.そのため今後はミニ社会科副読本を用いた授業実践を行うことで,より児童の「身近な地域」を重視した地域学習を展開することができると考えている.